

後期ヴィトゲンシュタインと本質について

On Essence in the Later Wittgenstein

白木啓吾

**Abstract**

This study examines the notion of “essence” (Wesen) in later Wittgenstein. Prior scholarship divides into two views: the standard interpretation, represented by Glock (1996) and Malcolm (1986), which takes Wittgenstein to be an anti-essentialist based on his discussion of family resemblance; and Ring’s (2019) view, which, drawing on PI §371, argues that Wittgenstein sought not to deny essence but to revise our understanding of it. This study makes two claims: Ring is broadly right but misinterprets grammar, and Wittgenstein’s treatment of essence hinges on a contrast between phenomena and grammar—a contrast overlooked in earlier work.

**(1) 研究テーマ**

本研究は、後期ヴィトゲンシュタイン哲学における「本質 (Wesen)」をテーマとして扱う。本研究の目的は、後期ヴィトゲンシュタインと本質主義に関する諸先行研究の所見に対して、(一) その誤解を指摘・修正することと、(二) 見逃されてきた新しい観点を提示すること、以上の二つである。

**(2) 研究の背景・先行研究**

一般的に、後期ヴィトゲンシュタインは反本質主義者と見なされている。この解釈は、『哲学探究』(PU) 第 65 節から第 67 節で展開される「家族的類似性 (Familienähnlichkeiten)」の議論を中心的根拠とする。

ヴィトゲンシュタインは『哲学探究』第 65 節以前において、言語をゲームと比較するという仕方で、言語について考察を進めている。このようにゲームの比喩において捉えられた言語を「言語ゲーム」と呼ぶ。ここでの考察は『論理哲学論考』(TLP) の批判と並行して展開されており、特に「名と対象の結合」や「複合的なものから単純なものへの分析」といった考えが俎上に上げられている。しかし、『論理哲学論考』の根幹は未だ手付かずである。『哲学探究』の本質に関する議論は、そのことに痺れを切らした『論理哲学論考』の著者が異議を唱えることから幕を開ける。

君は事を軽く扱いすぎている！ 君は可能なすべての言語ゲームについて語ってはいるがしかし、そもそも言語ゲームの本質とは何か、つまり言語の本質とは何かについては、どこにも述べていない。こうした出来事すべてに共通するものは何か、こうした出来事を言語に、あるいは言語の一部にするものは何かについては、どこにも述べていない。要するに君は、探究の中でも君自身をかつて最も思い悩ませたある部分を、すなわち命題の一般形式と言語の一般形式に関する部分を、なしで済ませている。(PU 65)

『論理哲学論考』の根幹とは、言語の本質、すなわち命題や言語の一般形式である。そして、それを突き止めることによって、言語の限界をはっきりと輪郭づけることこそが、『論理哲学論考』の最終目的である。『論理哲学論考』は実際に、その正誤や妥当性はともかくとして、確かにこの目的を果たしていた<sup>[1]</sup>。『哲学探究』が『論理哲学論考』の言語論を批判するのは構わないがしかし、それならば代わりとなる言語の本質を示してみせよ。ここで唱えられているのは、そのような異議である。

そして、私が言語の本質について何も語っていないということは正しい。私たちが言語と呼ぶものすべてに共通する何かを提示する代わりに、私は次のようなことを述べているのである。すなわち、これらの現象に共通する、それがために私たちがこれら現象のすべてに対して「言語」という同じ語を使用しているような、そのような何か一つのものなどまったく存在しない。むしろ、これらの現象は互いに多くの異なった仕方で類縁関係にあるのである。そして、この類縁関係のために、あるいはこれらの諸類縁関係のために、私たちはこれらの現象すべてを「言語」と読んでいるのである。(PU 65)

ヴィトゲンシュタインは自らが言語の本質について何も語っていないことを認める。しかしそれは、『論理哲学論考』の反論に対して何も応答していないというのではない。むしろ、これは徹底的な『論理哲学論考』批判である。なぜなら、この応答は、単に『論理哲学論考』が示した命題の一般形式を否定するのではなく、命題の一般形式を示そうとする『論理哲学論考』の試みそれ自体を否定しているからである。『哲学探究』は言語の本質を示さない。しかしそれは、『哲学探究』がその問題を回避しようとしていたからではなく、そもそも言語の本質など存在しないと考えていたからなのである。

本質とは一般的に必要十分条件のことを意味する<sup>[2]</sup>。したがって、言語の本質とは「私たちが言語と呼ぶものすべてに共通」し（必要条件）かつ、「そ

れがために私たちがこれら現象のすべてに対して「言語」という同じ語を使用している」（十分条件）ような何かである。『哲学探究』によればこのような言語の本質は存在しない。あるのはただ、多くの異なった類縁関係だけである。ヴィトゲンシュタインはこうした類縁関係を「家族的類似性」と呼ぶ。

私は、「家族的類似性」という語よりも適切に、その特徴を描写することはできない。というのも、ある一つの家族の構成員の間に成立している様々な類似性は、そのように重なり合い、交差し合っているからである。そうした類似性としては、体格や顔つき、目の色、歩き方、性格などがある。（PU 67）

Glock（1996）は、この家族的類似性という概念が「ヴィトゲンシュタインの本質主義への攻撃において極めて重要である」（p. 120）と主張する。さらに Malcolm（1986）は、こうした本質主義の拒否が後期ヴィトゲンシュタインの思考の際だった特徴の一つであるとさえ述べている（p. 236）。

このような標準的解釈に異議を唱えるのが、Ring（2019）による解釈である。Ring は『哲学探究』第 371 節を引き合いに出して、「彼の後期の見解が「本質主義への攻撃」、つまり本質への攻撃を構成すると言って要約することは、彼の歴史的に重要な功績、すなわち本質というテーマをその（主要な）歴史的根源から方向転換し、再方向づけしたことを深刻に誤解することになる」（p. 4）と主張する。

本質は文法のうちに表現されている。（PU 371）

標準的解釈のようにヴィトゲンシュタインを単に非本質主義者として評価する場合には、この一節を整合的に理解することが困難になる。しかし、標準的解釈が示しているように、ヴィトゲンシュタインが伝統的な意味での本質主義者ではなかったことは明らかである。そこで Ring は、ヴィトゲンシュタインが「本質」を伝統的な意味とは異なる仕方で使用していると推測する。

ヴィトゲンシュタインは「本質」という言葉を、「あるものについての最も重要なこと」や「物事の核心」にほぼ相当する広い意味で使っていたのではないかと推測する。（Ring 2019, p. 8）

実際、ヴィトゲンシュタインが「本質」という語を二種類の意味で使い分けていたことは、『哲学探究』第 92 節から読み取ることができる。

私たちが完璧な厳密さという状態を目指しているかのように見えることは、言語や命題、思考の本質に関する問いのうちに現れている。――と

いうのも、もし私たちが私たちの探究においても同様に言語の本質——言語の機能や構造——を理解しようとするとしても、それはやはり、この問いが見据えているものではないからである。なぜなら、この問いが本質において見ているのは、すでに隠されず明るみに出ていて、整理することによって見渡せるようになる何かではないからである。この問いが本質において見ているのはむしろ、表面の下にある何かである。すなわち、内にある何かであり、私たちが事柄を見抜くときに見出す何かであり、そして分析が掘り起こすとされる何かである。(PU 92)

ここでは言語の本質が二つに区別されている。一方は、伝統的なものであり、直接的には『論理哲学論考』が念頭に置かれている。他方が『哲学探究』のものである。伝統的な言語の本質とは、隠れており、分析によって見抜くことが期待されているものである。対して、『哲学探究』における言語の本質とは、隠れておらず、整理することによって見渡すことが期待されているものである。

さらに Ring は、『哲学探究』における「文法」が、「何を言うことが意味をなし、何を言うことが意味をなさないか」を定めるものだと主張し、以下のように『哲学探究』における本質を規定する。

ある種類の物事の本質は、それを指す用語の文法の中に、つまり何を言うことが意味をなし、何を言うことが意味をなさないかという点に見出される。(Ring 2019, p. 9)

こうして Ring は、ヴィトゲンシュタインがもたらした本質というテーマの再方向づけを、「彼が本質を構成するものとしての適用条件を放棄し、文法に置き換えた」(p. 10) と説明する。

### (3) 筆者の主張

本研究の主張は以下の二つである。第一が、Ring の議論は概ね正しいが、文法の理解において誤りを犯しているということである。第二が、『哲学探究』第 65 節の解釈に対して（ここにおいて標準的解釈と Ring の解釈は対立していない）、現象と文法の対立という新たな視点を付け加えることである。

第一の主張からはじめる。Ring は、『哲学探究』においては本質が文法によって構成されると主張し、そこに哲学史における重要な功績を見出したのであるがしかし、同時にこうした本質の理解は不完全であるとも主張する。

もし文法であって適用条件ではないものが物事の本質を構成するならば、トラとライオン（また赤と青も同様に）は異なる本質を持たない。動物

と色の文法は異なるが、トラとライオンはどちらも動物というカテゴリーに分類され、赤と青はどちらも色のカテゴリーに分類されるからである。(中略)トラとライオンの違い(赤と青の違い)は、本質の問題ではない。すなわちそれは、概念的な違いではなく、単なる経験的な違いということになる。(Ring 2019, p. 13)

ここでトラとライオンが同じ文法を持つと言われているのは、Ring が以下のような考えをしているからであると推測できる。まず、文法とは「何を言うことが意味をなし、何を言うことが意味をなさないか」を定めるものであった。そのため、「トラ」の文法とは「トラ」という語で何を言うことが意味をなし、何を言うことが意味をなさないかを定めるものである。これを外延的に理解すれば、「トラ」という語が含まれる有意味な言明のすべてということになる。同様に「ライオン」の文法を考えたとき、「トラ」の文法と「ライオン」の文法は完全に一致するだろう。こうして、「トラ」と「ライオン」の違いは概念的なものではなく、経験的なものになる。しかし、この結論は明確な誤りであるために、『哲学探究』における本質の理解は不完全である。

筆者の考えでは、この議論は誤りを含んでいる。この誤りの根源は、Ring が文法を規定する際に「状況」の働きを看過してしまっているところにある。Ring の言うように『哲学探究』における文法は意味に関わる。しかし、文法は単に有意味な言明の総体と一致するのではない。ヴィトゲンシュタインは例えば、ある数列の部分を見て、「その先を続けられる」と口にする場面について、以下のように述べる。

仮に「式を口にする事の背後」に何かが存在しなければならないとすれば、それは**特定の状況**である。私たちの頭にこの式が浮かんだ際に、私に対して「私は続けられる」と言う権利を与えるのは、この状況に他ならない。(PU 154, 強調原文)

状況は何かを有意味に発話することを正当化する。状況のこうした働きを踏まえると、「トラ」の文法と「ライオン」の文法は十分に区別可能である。確かに「トラ」と「ライオン」が現れうる有意味な言明の総体は完全に一致するだろう。しかし、それらの言明が有意味に発話されうる状況は異なるのであり、その点で「トラ」と「ライオン」は異なる文法を持つと言えるのである。例えば、トラの剥製を前にして「そこにトラがいる」と発話する人がいれば、私たちはその言明を偽なる言明として十分に理解できる。彼は剥製を本物と見間違えたのだ。しかし、同じ状況で「そこにライオンがいる」と発話する人がいれば、私たちはその言明を理解できない。彼はおそらくつまら

ない冗談を言っているのだろう。そうでなければ、彼はこれらの語を理解していないのだ。このように、「そこにトラがいる」という言明が有意味に発話できる状況と「そこにライオンがいる」という言明が有意味に発話できる状況は異なる。この点で、「トラ」と「ライオン」は、「何を言うことが意味をなし、何を言うことが意味をなさないか」に差異があると言える。したがって、文法だけで「トラ」と「ライオン」を区別することは十分に可能である。

第二の主張に移ろう。標準的解釈であれ、**Ring** の解釈であれ、先行研究は『哲学探究』第 65 節からヴィトゲンシュタインが少なくとも伝統的な意味での本質主義者ではなかったことを読み取っている。そしてこれはまったく正当な解釈である。その上で、筆者はこの正当な解釈に新たな視点を付け加えたい。それは、ヴィトゲンシュタインの主張に反して、ある意味では、「私たちが言語と呼ぶものすべてに共通する何か」が存在するということだ。

言語すべてに共通するもの、それは「言語」という名である。名こそが言語と呼ばれるものすべてに共通する唯一のものである。しかしそれにもかかわらず、「言語」という名が言語の本質であると主張する者は誰もいない。その理由は、名が現象ではないからであろう。実際、ヴィトゲンシュタインは『哲学探究』第 65 節において、「これらの**現象**に共通する、それがために私たちがこれら現象のすべてに対して「言語」という同じ語を使用しているような、そのような何か一つのものなどまったく存在しない」(強調筆者)と語っていた。つまり、現象の側では確かに、すべてに共通する何かは存在しないのである。そして、伝統的な本質主義者が本質として認めるのはあくまで現象の側に存在するものだけであり、それゆえに名は本質たりえないのだ。

名だけがすべてに共通する唯一のものである。筆者はこの指摘によって、言葉遊びをしているのでもなければ、名が本質であると言いたいのではない。そうでなくむしろ、言語が有する創造性に目を向けようとしているのである。つまり、言語には、それ自体ではまったく共通点を持っていない諸現象を結合させる力があるのである。

この主張には以下のような反論がありうるだろう。『哲学探究』の第 65 節では、家族的類似性によって、これら諸現象がすべて「言語」と呼ばれているのだと言われていた。したがって、これら諸現象を結合させているのは「言語」という名ではなくむしろ家族的類似性ではないか。このような反論である。しかし、家族的類似性だけではこの結合を十分に説明できない。例えば『哲学探究』第 66 節にならって、「ゲーム」という語について考えてみよう。将棋や囲碁には盤上で行うという類似性が、七並べやポーカーにはカードを使うという類似性がある。「ゲーム」と呼ばれるものを観察すれば、こうした

諸類似性の重なり合いが見てとれる。ヴィトゲンシュタインが言うように、私たちはこうした諸類似性を辿るようにして、あたかも繊維同士を撚り合わせて一本の糸を紡ぐように、概念を拡張していくのだらう (PU 67)。しかし、これらの類似性はあくまで結合のきっかけに過ぎず、結合を作り出しているのではない。もし類似性が結合を作り出すのであれば、なぜある類似性は結合を作り出し、その他の類似性は結合を作り出さないのか、その違いを説明せねばならない。例えば、「占い」はカードを使う点や娯楽であるという点で多くのゲームと類似しているにもかかわらず、ゲームではない。「戦争」は勝敗がある点や駆け引きがある点で多くのゲームと類似しているにもかかわらず、ゲームではない。家族的類似性だけではこの点を説明できない。結局、結合を作り出しているのは私たちがそれらを「ゲーム」と呼ぶこと、すなわち名なのである。類似性はあくまで、そのように呼ぶことのきっかけの一つに過ぎない。

実際、ヴィトゲンシュタインは言語のこうした力に自覚的であった。それは、『哲学探究』第 444 節および第 445 節から読み取ることができる。

彼が来たとき、それはどのように見えるか。——ドアが開いて、誰かが入ってくる、等々。——彼が来ることを私が期待しているとき、それはどのように見えるか。——私は部屋の中をあちこち歩き回り、ときおり時計の方に目を向ける、等々。——しかし、一方の出来事は他方の出来事と少しも似ていない！ それなら、いかにして人は「彼が来る」という同じ語をこれらの出来事の記述に使用できるのか。——しかしそのとき、私はひょっとすれば、あちこち歩き回りながら、「彼が入ってくるのを私は期待している」と口にするかもしれない。——今や、ある類似性が存在する。しかし、その類似性はどんな類似性なのか？！ (PU 444)

言語において、期待と実現は触れ合う。(PU 445)

〈彼が来ることの期待〉と〈彼が来ることの実現〉は、現象としては少しも似ていないにもかかわらず、同じ言葉で記述される。しかし、唯一これらが共有する類似性がある。それは、「彼が来る」という名に他ならない。すなわち、これらの結合は現象のうちで生じるのではなくむしろ、言語のうちで生じるのである。このような議論を踏まえると、『哲学探究』第 371 節を Ring とは違ったように解釈できるだろう。

本質は文法のうちに表示されている。(PU 371)

本質は現象のうちに表示されているのではなくむしろ、文法のうち、すな

わち言語のうちに表現されている。それゆえ、どれだけ現象を観察しても本質を見出すことはできない。本質の探究は現象においてではなくむしろ、言語においてなされなければならないのである。

#### (4) 今後の展望

本研究では、後期ヴィトゲンシュタインが本質という哲学に伝統的な概念に対してどのような立場を取っていたのかを考察した。本研究で明らかにしたのは以下の二つである。第一が、Ring の解釈は、概ね標準的解釈に対して適切な応答をすることに成功しているがしかし、文法の理解において不備があることである。第二が、現象と文法の対比という観点を導入することによって、言語の創造性を指摘したことである。

今後の展望は、今回指摘した現象と文法の対比について、さらなる探究を進めることである。今回はこのような対比が『哲学探究』の記述から見出されることの指摘にとどまり、その対比の内実を詳細に論じることはできなかった。この探究を進めるにあたって、ヴィトゲンシュタイン自身が中期において現象（学）を論じていたことが導きになるだろう。中期ヴィトゲンシュタインの哲学を読解することによって、現象と文法の間関係を究明することが次の課題である。

#### 注

[1]『論理哲学論考』では、「事態はかくかくである」が命題の一般形式とされている (TLP 4.5)。

[2] Glock (1996) p. 120 や Malcolm (1986) p. 236、Ring (2019) p. 4 など多くの文献で、本質とは必要十分条件であるとされている。

#### (5) 参考文献

[ヴィトゲンシュタインの著作]

PU: *Philosophische Untersuchungen*, Fourth edition, 2009, ed. Hacker, P. M. S. & Schulte, J. Wiley Blackwell.

TLP: *Tractatus Logico-Philosophicus*, 1922, Routledge

[その他の文献]

Malcolm, N. 1986, *Nothing is Hidden: Wittgenstein's Criticism of his Early Thought*, Basil Blackwell.

Ring, M. 2019, "Wittgenstein on Essence", *Philosophical Investigations* 42:1

Glock, H-J. 1996, *A Wittgenstein Dictionary*, John Wiley & Sons.

(中央大学)